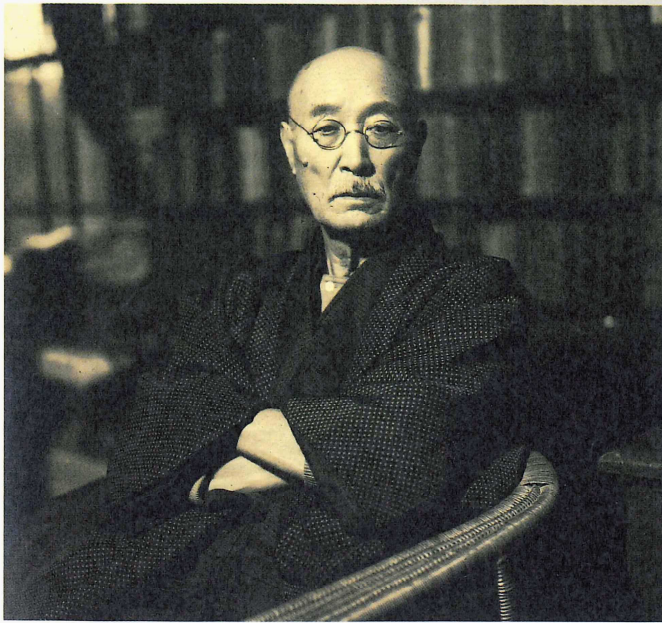


生誕百六十周年、佐藤昌介の大学観

大学文書館 井上高聡



自宅書斎の佐藤昌介（1930年、大学文書館蔵）

二〇一六年は佐藤昌介の生誕百六十周年に当たる。北海道大学では、W.S.クラークや新渡戸稲造の名前ばかりが話題に上る。中央ローンのクラーク胸像やポブラ並木近くの新渡戸胸像に足を運ぶ観光客は多いが、正門右手の事務局建物前の佐藤昌介胸像に足を止める人は少ない。けれども、佐藤昌介は、北大の歴史において、クラークや新渡戸以上に重要な人物である。せめて北大生はその名前を知っておこう。

佐藤昌介（一八五六〜一九三九年）は札幌農学校第一期生であり、クラークの直接の教え子に当たる。第二期生の新渡戸稲造にとっては同郷（岩手県）の先輩である。クラークが札幌農学校教頭として在任したのは約八ヶ月であり、新渡戸が教員として在任したのは一八九一〜九七年の七年弱である。一方、佐藤はアメリカ留学から帰国した後、一八八六年から一九三〇年までの四十四年間にわたって北大の教員を務め、特に一八九四年以降の三十六年間は校長・学

長・総長として北大を牽引し続けた。日本の官立高等教育機関でこれだけ長く学校のトップに位置し続けた人物は他に例がない。この間に幾度となく札幌農学校の廃校危機を回避し、東北帝国大学農科大学として大学に昇格させ、北海道帝国大学としての独立を実現した。佐藤が「北大の父」とも形容される所以である。

さらに一九一八年には、戦前期には制度的に大学への進学がほとんど不可能であった女性に対して、北大入学の道を開いた。大学への女性の入学は一九一三年の東北大学に次ぐ二度目であったが、以降、北大には終戦までに二十六名の女性が入学した。佐藤は、一九三〇年、女性の大学進学を念頭に講演の中で以下のように述べている。

最高学府タル教育機関ハ
宇宙万有ノ知識ヲ網羅研究
スルモノデアルト同時ニ知
識ヲ要求スル所ノ総テノ人
類ニ向ツテ其ノ門戸ヲ開放
スベキデアアル

クラークの“Boys, Be Ambitious!”

のような琴線に触れる金言ではないし、札幌農学校を離れた後に国際的に活動した新渡戸の「太平洋の架け橋」のような華々しさもない。しかし、「大学とは、学びたいと思う誰もが、あらゆることを学ぶことのできる場所だ」という佐藤昌介の大学観は、飾り気はないけれど力強い。現在の北大で学び、教え、研究し、支える誰もに訴えかけてくる言葉ではないだろうか。



佐藤昌介が教え子中島九郎に書き与えた扁額「学究今古」（1924年、大学文書館蔵）